

On Nomadic Pig Pastoralism in the Bengal delta of Bangladesh

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003860

バングラデシュのベンガルデルタにおけるブタの遊牧

池 谷 和 信*

On Nomadic Pig Pastoralism in the Bengal delta of Bangladesh

Kazunobu Ikeya

アフロ・ユーラシアにおける牧畜を対象にした人間生態学・生態人類学的研究では、これまでウシ、ヒツジ、ヤギ、ラクダ、トナカイなどの群居性の有蹄類に属する哺乳動物を対象にして、家畜と人との相互のかかわり方が把握されてきた。しかし、ブタの牧畜に関しては、国内外をととして先行研究がまったくみられない。そこで本研究は、バングラデシュの中央部に位置するベンガルデルタにおけるブタを対象にした遊牧の実態を把握することを目的とする。筆者は、2007年12月以降現在まで、おのおのは短期間ではあるが9回にわたりバングラデシュ国内において絶えず移動中のブタの群れを探し求めること、群れのなかのブタの年齢や性別構成を聞き取ることなど、飼育技術や移動形態などの生産に関する直接観察を行った。ここでは、「大規模所有者」(約800～1000頭のブタを所有)に焦点を当てることを通して遊牧の実際が把握される。その結果は、以下のとおりである。

遊牧されるブタは、一部のゴミ捨て場でのブタを除いて、1年を通してデルタに分布する野生タロを中心とした野生植物に全面的に依存する。とりわけ乾季にはブタは収穫後の農地に入り、農民にとっては雑草と評価されている植物を掘り起こして根の部分を食べる。収穫後の水田では、稲の収穫の際にこぼれ落ちた米粒が残っており、それが利用される。また、ブタの群れは、常に移動しているのできめ細かい移動の範囲を確定できないが、およそ10～20平方kmの遊動域を見出すことができる。ブタは、群れの移動と採食のための一時的滞在とを繰り返す。2時間弱のなかで母豚による授乳の時間が4回みられた。この授乳活動は、牧夫がそれぞれの子ブタを誘導するのではなく、子ブタの方が積極的に働きかけて群れのなかで自主的に開始される行動である。さらに、牧夫による群れの管理には音声が使われる。牧夫は生後まもない子ブタを

* 国立民族学博物館民族社会研究部

Key Words : nomadic pastoralism, pig, feeding resources, herds management, Bengal delta

キーワード : 遊牧, ブタ, 餌資源, 群れ管理, ベンガルデルタ

殺すこと、別の母親への子ブタの移出などによって各母ブタへの負担を均等に
する努力をしている。同時に、ブタの年齢に応じて群れを変えるなどして群れ
全体の管理がなされている。他のブタ飼育者からブタが購入されることなどによ
っても、ブタの所有頭数が維持される。

以上のように、バングラデシュのブタを対象にした遊牧は、年中群れとともに
に移動をして自然資源を利用する点、100～200頭の単位ごとの群れで分散飼
育して多様な環境を季節や微地形に応じてきめ細かく利用する点など、熱帯モ
ンスーンアジアのデルタにおける自然特性に応じた資源利用の形をよく示して
いる。

Previous studies of the interaction between pigs and humans have
emphasized house pigs, which are managed by keepers in sedentary set-
tlements. On the other hand, no ethnological studies have been made of
nomadic native pigs. Therefore, it remains unclear whether these pig groups
are nomadic or semi-nomadic in different study areas. Nobody knows who
keeps these pigs, how they are cared for and controlled, or for what purpose
they are being kept. Many anthropological studies of nomadic pastoralism
have been made, with the noteworthy exception of such pigs: a lone study of
pigs in Bangladesh is available in the literature. To investigate the actual con-
ditions of this type of nomadic pig husbandry, the author conducted ethnolog-
ical field research during the dry season (December 2007–February 2008) and
the rainy season (July–August, 2008). First, nomadic pig herds were sought in
the Dhaka area, Tangail District, and Gazipur District in the Bengal delta of
Bangladesh. The herds were then followed and observed to discover how they
fed and their routes of movement.

In Bangladesh, pigs are raised by humans. They are seasonally nomadic
while their owners seek grazing land and fodder for them. Each herd studied
included approximately 100–200 pigs. The herds move over vast areas while
seeking food in cultivated field lands. The movements vary according to the
seasons, the routes chosen according to food availability. Regarding the daily
routine of nomadic pig husbandry, pig keepers depart from their camp in the
morning and return to it in the evening. While herding their pigs, they dili-
gently prevent the pigs from entering cultivated fields. Each herd occupies a
wide area while seeking food in the open fields. By calling the pigs, the keep-
ers can reduce the area that the animals occupy: that is to say the pigs pay
attention to the commands of their handlers.

The route of movement of the pigs and the seasonal change of land use
are illustrative. Pig groups moved according to the season, depending on the
availability of food resources. During the rainy season (June–September), they
are able to live near flooded rivers. In years with large-scale flooding, they
are reportedly kept in the forest, where they can eat tree roots. During the

dry season, they are kept in cultivated fields after harvest. By digging in the soil, pigs are able to eat some plants that are considered noxious weeds by the farmers. The pigs can also eat rice grain remaining in paddy fields after harvest. However, when farmers began using a field for wheat and maize, the pigs had to be moved to other areas.

The seasonal change in feeding resources was as follows. During the dry season, wild plants such as taro were the most important feeding resource supporting nomadic pig husbandry. Crops were also used. During the rainy season, earthworms were used as fodder. I observed cases of pigs kept in rubbish disposal areas for a few months near the main road of the city. In this case, two keepers made a camp and cared for their pigs. The rubbish site was constantly supplied from the city with kitchen refuse, which the pigs were keen to eat. In February 2008, two handlers were keeping their pigs in the same refuse area. However, in August 2008, they lost this resource because a local government office prohibited use of the land as a rubbish dump. No further information relating to how they cared for their pigs was obtainable after that.

Nomadic pig pastoralism in Bangladesh depends on the seasonal use of natural resources and on less-seasonal kitchen refuse when available. The significance of this case study, for interactions between pigs and humans in tropical monsoon Asia, will be explored further in the near future.

- | | |
|------------------|--------------------------|
| 1 はじめに | 4 ブタ群の生産と変動 |
| 2 在来ブタを対象にした牧畜経営 | 4.1 放牧地の類型 |
| 2.1 飼育形態 | 4.2 群れの管理技術 |
| 2.2 牧畜の担い手 | 4.3 産子数と死亡率 |
| 3 ブタ群の餌資源と移動形態 | 5 考察—熱帯モンスーンアジアのデルタでの遊牧— |
| 3.1 自然的基盤としての餌資源 | 5.1 ブタ遊牧の生産性 |
| 3.2 移動の日変化 | 5.2 遊牧の比較研究のための枠組み |
| 3.3 移動の季節変化 | |

1 はじめに

アフロ・ユーラシアにおける遊牧を対象にした人間生態学・生態人類学的研究では、これまでウシ、ウマ、ヒツジ、ヤギ、ラクダ、トナカイなどの群居性の有蹄類に属する哺乳動物を家畜化した動物を対象にして、家畜と人との相互のかかわり方が把握されてきた（梅棹 1950; 太田 1982; 小長谷 1983; 佐藤 1992; 松井 2001; 池谷 2006 ほか多数）。そこでは、家畜の群れを管理する技術として、雄の去勢と放牧の際に母子を分離する技術とが存在することがよく知られている（梅棹 1976）。しかし、有蹄類に属するブタはもともと野生段階で群居性を持っているとはみなされてはいない。このため、本稿で対象とするブタの遊牧に関しては、国内外をとおして先行研究がまったくみられない¹⁾。

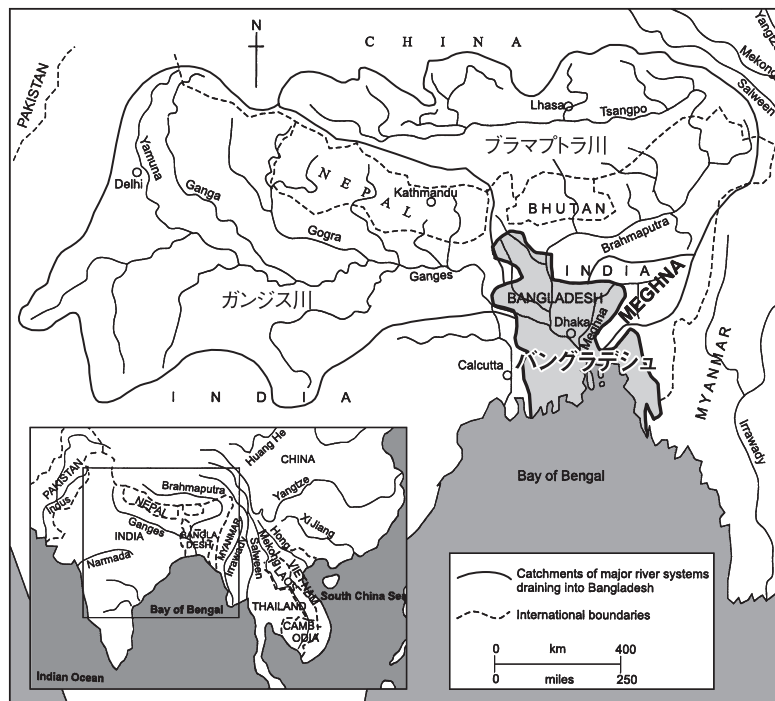
さて、牧畜は農耕結合の有無によって農牧と遊牧とに分かれ、さらに遊牧は、規則的移動であるか否かによって遊牧と季節遊牧に二分される（福井 1987）²⁾。本稿の対象地では、ブタを対象にして大規模な放牧の家畜飼養が展開されており、しかも移動が不規則であることからブタの遊牧という用語を使用する。また、これまで東アジアモンスーン地域のウシ、ブタ飼育者は、大規模放牧をするのに適した放牧地をもたないといわれてきた（谷 1994: 700）。本稿では、南アジアの熱帯モンスーン地域を対象にはいるが、ベンガルデルタの広大な空間を利用した放牧が行われている。

その一方で、ブタ飼育を対象にした人類学的研究では、パプアニューギニアや中国南部、タイ北部における、主に農民による放し飼いや舎飼いを対象にして、文化史、餌資源、飼育技術、生業活動、貨幣経済や儀礼とのかかわりなどに焦点がおかれた研究が蓄積されてきた（大林 1955; Rappaport 1968; 梅崎 2000; 小谷 2005; 野林 2007; Nakai 2008）。これは、農学のなかの養豚研究においても同様の傾向が認められ、豚舎のなかでブタを飼育する形態が養豚の一般的な形であるとみなされてきたが、柵の中や放し飼いのような野外飼育も存在することは知られている。しかし、1年中ブタの群れとともに牧夫が常に移動する遊牧形態のブタ飼育に関しては、それが本当に存在するのか否か、その実態がまったく知られていない状況にある。

本研究は、バングラデシュの中央部に位置するベンガルデルタにおけるブタを対象にした遊牧の実態を生態人類学の視点から把握することを目的とする。筆者は、2007年12月以降現在まで、おのおのは短期間ではあるが9回にわたりバングラデシュ国内において絶えず移動中のブタの群れを探し求めること、群れのなかのブタの年齢や

性別構成を聞き取ることなど、飼育技術や移動形態などの生産に関する直接観察を行った。とりわけ、2008年8月下旬（雨季）および2009年4月下旬（乾季）に、ブタ飼育者によって分散飼育されたおのおののブタ群を自らが訪れて、キャンプ地の位置、ブタの飼育頭数、牧夫数などを把握した。また2009年4月下旬には、母子から構成される群れの行動を追跡しながら、産子数と死亡率に関する現地調査を行った。

筆者の調査地は、バングラデシュの中央部に広がるベンガルデルタに位置する地域である（図1）。ここは、インドのヒンドスタン平原から流れてくるガンジス川（バングラデシュではポッダ川と呼ぶ）、中国のチベット高原からアッサムをへて流れるブラマプトラ川（バングラデシュではジャムナ川と呼ぶ）の合流点に近く、その左岸の部分に当たっている。また、上述したように、ブタの群れは絶えず移動を繰り返していることから、牧夫が寝泊りするキャンプ地が動かない場所を見つけることは難しい。その結果、本稿が研究対象とする地域は国内のタンガイル（Tangail）県、ガジプール（Gazipur）県、ダッカ（Dhaka）県など複数の県にまたがることになり、その総面積は数十平方 km に広がる。



Source: Adapted from UNDP (1989b)

図1 バングラデシュの位置

まず、バングラデシュ政府が公表する毎年の家畜センサスでは、ウシ、水牛、ヤギ、ヒツジ、ニワトリ、アヒルの頭数は示されるがブタの頭数は明記されていない。しかし、これは国内にブタがいないということを示すものではない。イスラーム教徒が大部分を占めるこの国は、彼らから卑しまれるブタの頭数を把握することが軽視されてきたためである。調査地の気候では、熱帯のモンスーン気候であり、雨季（およそ6～9月が洪水期）と乾季の2つの季節が存在することが特徴である。年により異なるが、6月ごろより雨季が始まり、8月には川の氾濫も大きくなり、各地で見渡す限り水面が広がって陸の面積が小さくなる。そして、10月には川の水位がさがってきて氾濫が終了して元の状態にもどることになる。

バングラデシュのブタは、家畜の全身が黒色のブタである（写真1）。形態をみると、全体がスマートな体型をしていて鼻が前に出ておりイノシシによく似ているほか、頭の上から背中に伸びる長いたてがみが特徴的である。しかし、家畜豚（*Sus scrofa domesticus*）の一種である。年齢に応じて大きさは異なる一方で、成獣において体長や体重を示すデータはみられないが、体高は48.8～52.83 cmを示す（黒澤1988）。遺伝学の専門家によると、このブタは「イノシシ型」と呼ばれ、ユーラシア大陸で現在みられる在来豚としてはもっとも原始的なタイプの1つであるといわれる（Kurosawa 1995）。どうしてこのようなブタが現在でも存在するのかは興味深い研究課題ではあるが、ここではベンガルデルタにおけるブタ遊牧の現状に焦点を当てて記述・分析をすすめる。



写真1 「イノシシ型」と呼ばれるバングラデシュの在来ブタ

2 在来ブタを対象にした牧畜経営

現時点では、ベンガルデルタにおけるブタ所有者総数や世帯別の所有頭数の全体を数量的に把握することはできない。しかし、これまでの筆者による現地での広域調査によると、1世帯当たり数十頭から千頭以上に至るまで所有頭数には違いが存在している。ここでは、「大規模所有者」（約800～1000頭のブタを所有）の事例に焦点を当てることを通して遊牧活動の実態を把握する。

2.1 飼育形態

筆者が研究対象にしたブタ所有者は、2008年の8月下旬の雨季には812頭のブタ、2009年4月下旬の乾季には1159頭のブタを所有していた（表1および表2参照）。

表1 分散飼育されるブタ群の放牧地、牧夫数、飼育頭数（2008年8月の雨季）

ブタ群	放牧地	牧夫数	飼育頭数
1	タンガイル県アラシン	6	218
2	タンガイル県トラボンズ	?	113
3	タンガイル県ゴバルプール	5	143
4	タンガイル県カンナバル	9	128
5と6	不明	9	210
合計		29人	812頭

出所：2008年8月下旬の現地観察（ブタ群の5と6は、聞き取りによる）

表2 分散飼育されるブタ群の放牧地、牧夫数、飼育頭数（2009年4月の乾季）

ブタ群	放牧地	牧夫数	飼育頭数
1	ガジプール県ボロバリー	2	28
2	ガジプール県コナバリー	3	80
3	ガジプール県カリコール	5	149
4	ガジプール県カリコール	5	145
5	タンガイル県コールメジュニ	4	142
6	タンガイル県ジョインプール	5	217（182頭はほぼ生後1.5ヵ月）
7	タンガイル県ジャブラ	6	226（185頭は生後4ヵ月）
8	タンガイル県ドロプール	6	172（すべて1歳以下）
合計		36人	1159頭

出所：2009年4月下旬の現地観察

まず8月下旬の雨季においては、首都ダッカから北におよそ100 km離れたタンガイル県内を中心として6つの群れに分けて分散飼育をしていた(写真2)。それぞれの頭数は、筆者の現地調査によって県内のアラシンにて218頭、トラボンズにて113頭、ゴバルプールにて143頭、カンナバルの128頭、さらに残りの2つの場所にてあわせて210頭に達することがわかった。なかでもトラボンズにおいては飼育されているすべてのブタは、放牧地の近くに暮らす別のブタ所有者から新規に購入されたばかりのブタであった³⁾。

同様に2009年4月下旬の乾季においては、上述のブタ飼育者は8つのブタ群に分けた分散飼育をしていた。それぞれの群れは、ダッカ近郊のガジプール県ボロバリーの28頭とコナバリーの80頭、ガジプール県のカリコールでは149頭と145頭、タンガイル県のコールメジュニの142頭、ジョインプールの204頭、ジャブラの226頭、ドロプールの172頭から構成されている。

このように、ブタ群の総数は、8月下旬の雨季には6つの群れで812頭、4月下旬の乾季には8つの群れで1146頭というように時期によって違いが認められた。また、各々のブタ群における牧夫の数は2～9人を示し、大きなバラツキがみられたが、1つの群れ当たり4～6人が平均的な数であった(表1、表2参照)。さらに、4月下旬の乾季のブタ群の滞在した場所のなかには、ダッカ周辺の街に隣接する2ヵ所のゴミ



写真2 分散飼育された群れのなかの1つのブタ群

捨て場（ガジプール県のボロバリー、コナバリー）が含まれていた。これは、ブタ肉の大消費地の1つであるダッカへのブタ肉の安定的な供給をするために、ゴミ捨て場がブタを恒常的に屠殺する場所にも近く、流通ルートのなかで中継地として選ばれていることによる。

2.2 牧畜の担い手

バングラデシュは、2005年の世界銀行の資料によると人口総数は1億4千万人に達しており、2001年の国勢調査によるとイスラーム教徒89.7%、ヒンドゥー教徒9.2%、仏教徒0.7%、キリスト教徒0.3%から構成される。このようにイスラーム教徒が人口の約9割を占めるが、ブタ飼育をイスラーム教徒が担うことはない。また、ヒンドゥー教のカーストのなかにはブタを蔑視する人々が多く、低カーストの人々のみがブタ飼育に従事する。彼らは、自らの村においても数頭のブタを所有して飼育することが多い。このほかには、ベンガル系のキリスト教徒、マンディ（ガロ）、サンタル、チャグマのようにバングラデシュではトライブと呼ばれる少数民族の人々がブタ飼育に従事する（Singha and Reza 2005）。トライブの人々にとっては、ブタは食肉用のみならず結婚式や葬式などの儀礼の際に屠殺されるものとして生活に欠かすことのできない存在である。



写真3 携帯電話を使用する牧夫

本稿の調査対象集団は、すでに述べたようにある特定の「大規模所有者」に限定した。対象者は、父親の代から受け継いでブタを所有するベンガル系のキリスト教徒である。また彼は、分散飼育されるブタの群れの管理を直接的に扱う牧夫を配置させており、群れごとに1台の携帯電話を渡している。そして、時々群れを訪問することはあるが、ダッカ市内の中心部に居住し、携帯電話を利用して各々の群れの最新の状況を把握している（写真3）。この点では、不在の家畜所有者であるといえる。しかし、思うように電話連絡がとれないことも多い。その際には、定期的に群れを見回る人を送ることになる。ここでは詳しく述べないが、牧夫が群れのブタを勝手に売却したなどのトラブルが原因となって、牧夫のメンバーの流動性が高い。

その一方で、彼が所有するブタを現場で飼育する人々には、一部はトライブもいるがヒンドゥー教の低カーストに属する男性が大部分である。筆者は、過去3年間（2008～2010年）にわたり「大規模所有者」に雇用される牧夫の年齢や出身地などを調べてきたが、バングラデシュの北西部に位置するランプール県（Rangpur District）出身の人が多いという傾向がみられた。同時に、牧夫の入れ替えがかなり頻繁にみられることを筆者は把握している。例えば、2009年4月にはある特定のブタ群には5人の牧夫が随伴していたが、同年8月にはその群れのすべての牧夫がその仕事をやめていた。その理由としては、さらに高い給与を求めて他のブタ所有者のもとへの移籍や、自分の村での農業労働のためなどが挙げられている。つまり、1年中ブタ群とともに移動と放牧を続ける牧夫の仕事は低賃金の割には楽なものではない点、その仕事は郷里から数百kmも離れている点などから、牧夫はたえず入れ替わるものとしてみられる。

このような点から、ブタを飼育する「大規模所有者」は、ブタの遊牧的生産活動を行うけれども遊牧民ではないことがわかる。また、男性のみが牧夫の仕事に従事して移動集団を構成しているが女性はまったく参加していない。しかしながら、牧夫の母村では女性が飼育しているブタに直接的に接して餌を与えるなどの仕事に従事しており、移動集団には女性がいない点と対照的である。

3 ブタ群の餌資源と移動形態

ブタの遊牧が、どうしてバングラデシュのような熱帯アジアの湿潤地域に展開しており、しかも人口密度の高いベンガルデルタにおいて広くみられるのであろうか。その問題に答えるためには、この地域にはブタのためにどのような野生植物などの餌資

源が存在するのかを明らかにしなければならない。同時に、その餌資源の分布と密接にかかわると推察されるブタ群の移動の形態を把握する必要がある。

3.1 自然的基盤としての餌資源

ベンガルデルタは、雨季と乾季によって水面の広がる地域が大きく異なる。年によって異なるが、雨季には川が氾濫することで陸地は狭くなる。また、その氾濫の時期が地域によって異なる。対象地域には、ブラマプトラ（ジャムナ）川の支流の大小の川が数多くみられるが、その環境には地域性が存在する。その一方で、ベンガルデルタは大きくみると平坦地ではあるが、細かく見ると1 m単位での段差が存在する。それによって、雨季が終了したあとの水の引き方が微地形に応じて微妙に異なってくる（図2参照）。図2で示されるように、ブラマプトラ川の場合、自然堤防上に集落が立地して、その背後の低地が氾濫によって水がたまりやすく浮稲などの水田耕作が行われるが、そこよりは標高がわずかに高くなるパール（Beel）などの微高地がブタの放牧地として重要になってくる。さらに、人口密度が高く農業の盛んなベンガルデルタにおいては、ブタが放牧するための専用の土地はほとんどないといってよい。後述するが、収穫後の農地や道路沿いの農地と道路との隙間などの未利用地が放牧地としてくまなく利用されることになる。

まず、筆者は、ブタ群が採食している餌資源の全体像を把握することに努めた（野生生物の学名や英語名は表3を参照）。その結果、季節に限定されて利用できる餌資

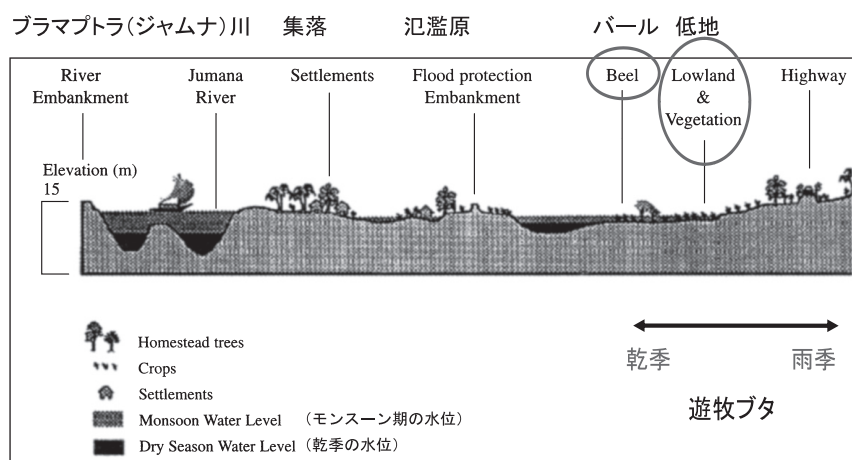


図2 ベンガルデルタの典型的な微地形
出所：Ali, M. S. et al. (2000)

表3 ブタが採食する主な野生植物

地方名	英語名	ファミリー名	植物名
Gechu	不明	Aponogetonaceae	Aponogeton natans
Shaluk	water lily	Nymphaca stellata	Nymphaca nouchali
Kachu	Chinese taro	Araceae	Alocasia cucullata
Vadali, Mutha, Kenna	nut grass	Cyperaceae	Colocasis esculenta(L.) Schott cyperus rotundus L.

注：バングラデシュ農業大学の Azad-ud-doula Prodhan 博士の植物同定による。

表4 遊牧ブタの餌資源の月別変化

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
ゲチュ	○	○	○	○	○	○						
シャリック	○	○	○	○	○	○						
コチュ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
バタリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
米				○			○	○	○			
ミミズ								○	○			
コステリ								○	○			
生ごみ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

出所：筆者による現地観察および聞き取り

源と年中にわたり利用できる餌資源とがあることを把握した。その結果をまとめたのが、表4である。この表より、「ゲチュ」(Gechu)と「シャリック」(Shaluk)と「コステリ」(ホテアオイ) (Kosteli) が季節限定型の野生植物であり、「コチュ」(Kachu)と「バタリ」(Vadali) は1年を通して利用できることが明らかになった⁴⁾。この他には、収穫後の水田にみられる稲の粃のついた米粒が乾季の間に利用される。さらに、ミミズなどの昆虫が不定期ではあるが餌となっている。

「ゲチュ」は、耕起が終了した畑地にみられる植物である(写真4)。長さ10cm余りの緑の細長い草に根茎部がついている。これは、その土地の農民にとっては雑草であると評価されている。ブタは、その根茎部を採食する。同様に「シャリック」も、収穫後の畑地にみられる植物である(写真5)。地下には、細長い根茎が発達している。これもまた、ブタが土壌表面を掘り起こすことで採食することになる。「コステリ」は、収穫後の水田のなかで、しかも水が残っている水生環境において自生する(写真6)。このため、この植物の場合には利用できる時期が限定されていて、葉の部分の採食するのみである。

池谷 バングラデシュのベンガルデルタにおけるブタの遊牧

餌資源のなかで最も重要なものは、その定量的な資源量を把握したわけではないが、その分布の広さなどから「コチュ」(野生タロ、サトイモ)である。これは、ベンガルデルタのあちらこちに自生する。稲穂の伸びた水田の畦の部分(写真7),



写真4 ブタの餌「ゲチュ」



写真5 ブタの餌「シャリック」

道路沿いに細長く広がる未利用地，農村集落のなかの池の周囲など，その分布の範囲は広い。しかも，この植物の場合，根茎部が特に重要である。根茎部のほかにストロン（ほふくし）があり，これが地面に平行に，地下で伸びているのである。ブタは，



写真6 収穫後の水のある水田でのブタの餌「コステリ」(ホテイアオイ)



ストロン stolon 匍匐枝(ほふくし)



写真7 ブタの餌「コチュ」(野生タロ)

ストロン以外の大部分を食用にしているが、地上部の葉の部分よりも根茎部を好むといわれる。なお、このストロンから2～3ヵ月後に再びタロの根茎部が成長していくのだという。最後の「バタリ」は、地域によってベンガル語で Mutha や Kenna と呼ばれ、根茎部が利用される（写真8）。これは、野生タロのようにどこにでも生息しているものではなく、水田やジュート畑の収穫後の農地にみられる植物である。

以上のように、遊牧されるブタの大部分の餌資源がベンガルデルタに生息する野生植物であることが明らかになった。同時に、これらの植物の分布や密度などの生息状況には農業という人間活動などの影響が存在する可能性が高い。牧夫は、農民が雑草として評価している植物を、ブタを媒介として有効にくまなく利用していると捉えることもできる。繰り返しになるが、筆者の調査によると、ブタにとっての餌として野生の「コチュ」（野生タロ）が最も重要であるということがわかってきた。牧夫に聞くと、ブタの側も水面に広がるホテイアオイという水草の葉よりは野生タロの根茎部のほうをより好むという。このタロは、意外にも、村の周辺や水田のあぜ道など、行



写真8 ブタの餌となる「バタリ」

き先々のあちらこちらに自生している。

3.2 移動の日変化

現時点では、対象者のブタ群の移動状況について年間を通じてトレースできたわけではない。これらは、上述したような餌資源の分布状況に大きく左右されることになるであろう。また、すでに述べたように、餌資源の状況は、乾季から雨季にかけての氾濫域の変化、河川水の浸水時期に影響を与える微地形の状況、年によって異なる氾濫の大きさなど、さまざまな要因に左右される。

図3は、2009年4月26日から5月2日までのある特定のブタ群（表2のNO.6を参照）の移動の状況を示す。対象者の群れの中心は多数の子ブタである。35頭の母ブタと182頭の子ブタから構成されていた。しかも、子ブタの年齢はほとんどが1.5ヵ月であった。この図より、毎日、ブタの群れに移動が認められることがわかる。1日あたりの距離は、およそ5kmにも及ぶ。あとで牧夫に聞いたのであるが、わずか1.5ヵ月の子ブタは、1日当たり5kmを自力で歩けるといふ。筆者の観察によると、この5日間において大きな橋の下の河原や幹線道路に近接する場所がキャンプ地・放牧地として選ばれていた（写真9）。また、イスラーム教徒が大多数を占める



写真9 橋の下での河原での放牧風景

都市の中心部の道路を突っ切ることもあったが脱落した個体はいなかった（写真10）。その際、道路には大型のトラックやバスが走り、子ブタが道路の中央部に進む際には牧夫がそれを阻止していた。道路沿いにいた人々のなかでは、ブタの発するにおいのためか布で口をふさぐ人々がいた。

2009年5月2日に焦点を当てて、約3時間あまりのブタ群の移動状況を具体的にみてみよう。なお、5月2日におけるキャンプ地は、図3を参照されたい。



写真10 街のなかを横切る牧夫と約200頭のブタ群

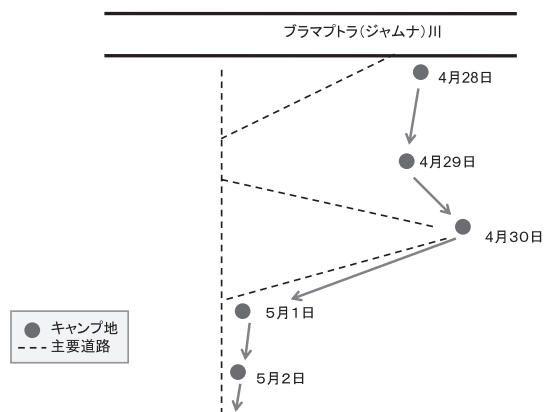


図3 あるブタ群の移動ルート（2009年）
出所：筆者の現地調査による

- 10:45 雨が降り始めて、ブタ群とともに橋の下に滞在。
- 11:18 (次の場所へ) ブタ群の移動。
- 11:21 ブタ群の採食開始。(9 分間)
- 11:30-33 授乳。
- 11:50 牧夫のなかのリーダーが、これからの餌場を探すために先に出発。
- 12:00 移動。
- 12:04 採食開始。(3 分間) (イスラーム教徒の人が、ブタを追ひ払う)
- 12:07 移動。
- 12:09 採食開始。(11 分間) (「コチュ」を採食)
- 12:20 移動。
- 12:26 採食開始。(11 分間) (「コチュ」を採食)
- 12:37-38 授乳。
- 12:38 移動。
- 12:58 採食開始。(8 分間)
- 13:06 ~ 授乳。
- 13:26 ~ 授乳。

以上のようなブタ群の移動状況の事例から、ブタは、群れの移動と採食のための一時的滞在とを繰り返していることがわかる。餌としては、「コチュ」が重要である。また、この事例では、12:04 にイスラーム教徒の人がブタを追ひ払うことによって採食時間が他と比べて3分間と短くなっているのであるが、それ以外は1ヵ所当たり約8～11分のあいだ採食をしていた。さらに、わずか合計で2時間弱のなかに母ブタによる子ブタへの授乳の時間が4回にわたりみられた。この授乳活動は、牧夫がそれぞれの子ブタを誘導するのではなくて、子ブタの方が母ブタに積極的に働きかけてブタ群のなかで自主的に開始される行動である。

その一方で、都市周辺の幹線道路沿いには大規模なゴミ捨て場があり、そこもブタの放牧地として長い時には数ヵ月にわたり利用されることがある⁵⁾ (写真11)。そこでは、ビニールテントでおおわれた放牧キャンプ小屋が建てられ、2人の牧夫によって数十頭のブタを管理することになる。ゴミ捨て場では、ゴミ運搬人によって人力の台車を使って付近から常にゴミが供給されており、ブタは生ゴミを採食することが多い。しかし、その場所は換金目的のために紙類や空き缶類を採集する人々の仕事場でもある。2008年2月には、ダッカ近郊のガジプール県コナバリーの場合は、橋のた



写真 11 ゴミ捨て場で放牧されるブタの群れ

もとの幹線道路の両側にゴミ捨て場が広がっており、本稿が対象とするブタの群れと所有者の異なるブタの群れが、道路をはさんで分かれることで限られた資源を分かち合っていた。その後、同年 8 月には、地方自治体の決定によって衛生上の理由からそこでのゴミ捨てが禁止されて、ゴミ捨て場と幹線道路との間に高さ 1 m 余りの柵が設けられた。その結果、牧夫はゴミ捨て場という安定した放牧地を失うことになった。

3.3 移動の季節変化

上述したように、ある特定の「大規模所有者」は、複数のブタ群を所有しながら分散飼育を進めている。そこで、2008 年 2 月から 2009 年 4 月にかけての 4 つの時期におけるブタ群の放牧地を示すものとしてキャンプ地を地図化した（図 4abcd）。それぞれの場所と首都ダッカとの地理的距離を把握することができる。ブタ群の場所は、筆者による現地キャンプへの訪問日に確認できた場所であるが、そこに雨季や乾季のあいだそのままとどまっていたことを示すものではない（写真 12）。

まず、2008 年 2 月の乾季においては、タンガイル県内に 3 つの群れ、ダッカから北に約 10 km 離れた郊外に 1 つの群れを確認することができた（図 4a）。後者はガジプール区内のゴミ捨て場であり、ブタを屠殺後にダッカ中心部で販売するための中継地となっている。次に、2008 年 7 月の雨季には同じタンガイル県内に 1 つの群れ、ダッカの近郊に 2 つの群れがあった（図 4b）。ここでもまた、1 つは前回と同じゴミ

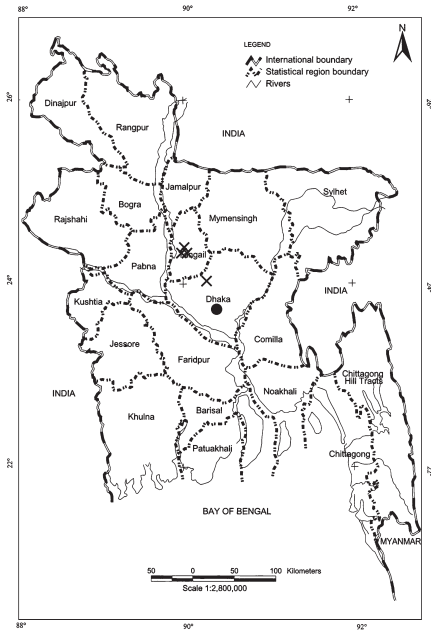


図 4a プタ飼育者のキャンプ地の分布：
2008年2月（乾季）×はキャンプ地
を示す

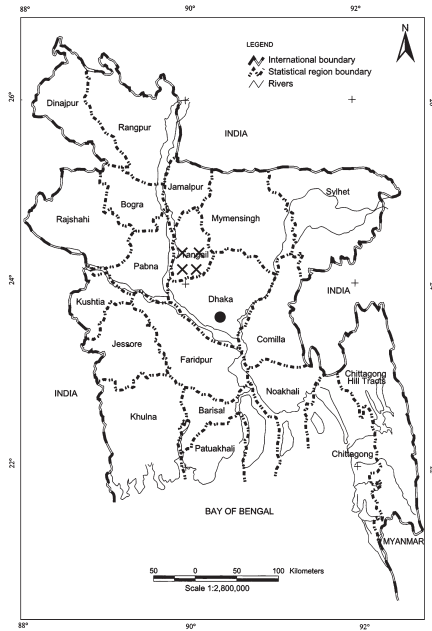


図 4c 2008年8月（雨季）

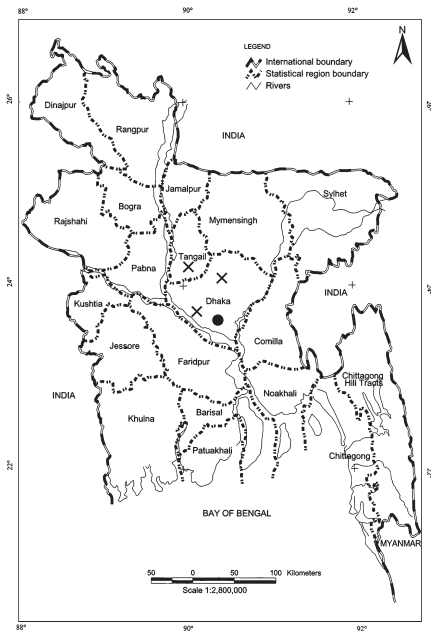


図 4b 2008年7月（雨季）

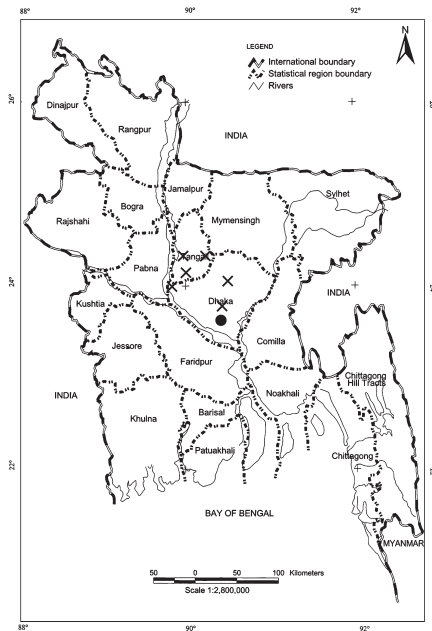


図 4d 2009年4月（乾季）



写真 12 放牧の拠点となるキャンプ地 乾季の河原に位置する

捨て場が放牧地になっている。さらに、2008 年 8 月の雨季には、すべての群れはタンガイル県内に入っている（図 4c）。その結果、ダッカ郊外でのゴミ捨て場における滞在がなくなっている。2009 年 4 月の乾季には、前回と同様にタンガイル県に加えて、その南の県においてもブタ群が滞在している。前々回のように、ダッカ近郊のゴミ捨て場にも群れが置かれている点に注意しよう（図 4d）。

このように、筆者の調査対象のブタ飼育者におけるブタ群は、それぞれ常に移動しているのできめ細かい移動の範囲の季節的変遷を把握することはできないが、およそ 10 ～ 20 平方 km 程度の遊動域を見出すことができる。つまり、本事例におけるブタの群れの遊動域はタンガイル県およびダッカ県内が中心であり、それ以外の県にはブタ群を移動させることはあまり多くないことが明らかになった。

4 ブタ群の生産と変動

ブタ群の遊牧には、放牧するための広大な土地と牧夫としての労働力が不可欠である。また、牧畜の担い手には、単独のブタを飼育するのではなく、群れとしてブタ群を管理するための技術が必要である。ここでは、ブタ遊牧が成立するための基盤になる、ブタ群のための放牧地と群れの管理技術に関して記述する。

4.1 放牧地の類型

すでに述べてきたように、調査地にはブタ飼育者が独自に利用できる放牧地は存在しない。ブタ群は、農民の私有地や国の所有地を放牧に利用する。筆者の現地調査によって、以下のように放牧地を分類することができる。

まず、放牧に利用される農地である。これが最も広範囲に分布する。農地には、水田と畑地の2つが存在するが、両者とも収穫後において放牧地として利用される（写真13）。ここで、ベンガルデルタの水田には多様な形が存在することにふれておこう。まず、アマン（Aman）のような品種が雨季のあいだ浮稲として一面に栽培される水田である。また、乾季には灌漑用の水を必要とする水田も存在する。写真14のように、手前の部分では水田で田植えをしているが、その隣接地域では収穫後の畑地にブタの群れが放牧されている（池谷 2010c 参照）。

次は、国によって所有される未利用地である。これは、乾季の間に干上がった川沿いの土地であったり、高台につくられている道路の端につながる斜面、池の周辺であったりする（写真15）。筆者は直接確認をしたわけではないが、国によって管理されているサラソウジュ（ゴザリー）の樹木からなる森（Sal Forest）も放牧地として利用されることがあるという（黒澤，私信）。ブタは、森林内の土を掘ることで植物の根の部分を利用できる⁶⁾。



写真13 収穫後の農地でのブタの放牧

最後は、都市近郊にあるゴミ捨て場である。これは、一部のブタ飼育者に利用されているのみである。ここには、捨てられた野菜や果実など、多くの生ものが残されているのみならず、毎日、新たな廃棄物が供給されている。この点からみると、最も安定した資源を供給できる放牧地であると評価できる。しかし、その資源の管理に当



写真 14 田植えの行われている水田後方でのブタ放牧



写真 15 道路沿いのブタ群の移動

たっては地元の行政の働きかけを無視することはできない。筆者が定点観測をしていたゴミ捨て場では、豚インフルエンザの影響を受けて2009年にゴミ捨てが禁止されたことで、牧夫にとっては放牧地を失う結果をもたらした。

このように放牧の際には、人々はブタ群が独占できる土地の利用権を持っているわけではない。冒頭でも述べたように、ブタは、収穫後の水田に落ちたもみ殻や畑の野草の地下部などを餌とする。しかし、農地の持ち主の多くはイスラーム教徒の人々であるので、群れに随伴している牧夫はブタの動きを細やかに見ている（写真16）。イスラーム教徒の人々はブタを快く受け入れていないことも多く、上述したように、近くにいた人々にブタとともにあっちへ行けといわれた場面に出くわすこともあるが、これまで農民との間での放牧地をめぐるトラブルはあまり多くない。

4.2 群れの管理技術

牧夫は、どのような方法でブタの群れを管理しているのであろうか。筆者がブタの群れに追従してみると、ブタの群れの動きに牧夫がついていくのか、牧夫が常にブタの移動を促しているのか区別が困難である場合が多い。ブタ遊牧は、1つの群れに対して3～4人の男性の牧夫から構成されるのが普通である。このほかに、それらの集団の後方に少し遅れて野営用のテントの骨組みを運搬する人が必要である。彼は、炊事用の鍋や皿や食器なども持参していて、その重さは10kgを超える。日によって異



写真16 農作業（ジャガイモの収穫）の行われている農地に近接してのブタ放牧

なるが、1日に少なくとも5 kmは移動する。

牧夫は、道路沿いの水田の土手でブタを放牧させたり、道路から遠く離れたところでキャンプしたり、自然の状況や人の状況を考慮してブタとともに移動する。バングラデシュでは、モンスーンの影響を受けて6月頃から雨の多い雨季となるのが普通である。ブタ飼育者にとって、もっとも試練の時期である。この時期には、各地の川が氾濫して水面が広がるので地表面が狭くなり、ブタの餌資源が不足しがちである。

ブタ飼育者は、河川敷や道路近くの未利用地において、自然の地形を考慮して野営をする。家財道具を運ぶ人が、毎日の食事をつくることになる。テントの設営は簡単で、数mの長さの竹の棒でテントの軸をつくり、それをドーム状に固定してからビニールシートをかぶせるだけのものである。下にもシートが置かれる。食事は、1日に朝と夜の2食が基本で、自らが料理したチャパティやライスが中心になるが、近くで購入した野菜や魚の入ったカレーが添えられる。飼育しているブタを屠殺して、その肉を食べることはほとんどみかけない。

ブタの群れをじっくりみていると、放牧中や授乳中、出産直後など、ブタと牧夫との間のかかわりあいを見ることができる。放牧の際には、牧夫が追従していない場合、個体と個体との距離が大きくなり、一見、ばらばらに個体が広がっているようにみえる（写真17）。おのおののブタが餌を求めて拡散するのである。しかし、牧夫がある声を発すると、個体間の距離は小さくなり群れは凝縮していく。このほかにも、



写真17 個体間の距離が大きくなったブタの群れ（収穫後の水田）

ブタに対するいくつかの牧夫の掛け声・呼びかけがある。「へれへれ」と牧夫が発するとブタの群れは不思議と進んでいく。「ホーン」は止まれ、「ハイ・フーン」はこっちに来いを意味するという。

その一方で、すでに述べたように、「大規模所有者」の場合、再生産を目的にした繁殖用の群れ（reproduction group）を除いて、ブタの年齢に応じて7～8頭の群れに分けて飼育される（表1および表2参照）。それぞれの群れは、1年中、餌となる野生植物を求めて牧夫とともに各地を分散して移動する。ここで、キャンプ地を拠点として分散飼育されている群れのブタの年齢や性別をみてみると、種オスと妊娠が期待されるメスの含まれる繁殖集団に加えて、雌雄の区別とは関係なく年齢に応じておのおのの群れが分けられているのがわかる。

まず、生後3～4ヵ月までの子ブタは、毎日、授乳が欠かせないために母ブタとともに放牧される。その後、5ヵ月になると母ブタは別の群れに移籍させられ、子ブタのみが残される。その後、生後8ヵ月、10ヵ月、12ヵ月、14ヵ月のブタは、それぞれ別の群れで継続して飼育される。去勢は、一部のブタを除いて生後8～10ヵ月後に行われる。そして、約18ヵ月のブタは、上述したように都市近郊のゴミ捨て場での放牧をへて食肉用として販売されることになる。

ここで、ブタの再生産を目的とする集団について詳述する（写真18）。この集団は、1～5歳までの雌ブタと10ヵ月（訓練のため、種雄30頭のうち8頭を占める）～7



写真18 再生産を目的にした群れ

歳までの種雄ブタから構成される。その構成比は、3:1を示す。また、群れのなかで複数のブタが同時に妊娠するわけではないので、約半数が妊娠すると独立して新たな群がえられる。ブタの妊娠期間は、約120日であるという。

このようにブタ所有者は、ブタの性や年齢に応じて群れを分けて牧畜経営に従事しており、それぞれの群れの牧夫は管理する技術を持っている。なかでも、絶えず移動しながら再生産を目的とした集団の群れが存在することは、自立的な牧畜経営の一端をよく示すものである。

4.3 産子数と死亡率

ブタ飼育者は、繁殖用の群れを除いて、ブタの年齢に応じて数種類の肥育用の群れに分ける形態をとることは述べた。同時に、野生植物を求めて牧夫とともに各地を分散して移動する。すでに3.2で述べたように、ブタの遊牧による移動をみると、授乳風景が頻繁にみられた。放牧中に子ブタの鳴き声が大きくなることで、授乳の開始がわかる（写真19）。子ブタが母ブタのミルクを求めているサインである。しかし、母ブタのなかには餌を探すことに夢中で、授乳のために体を横に倒すことを拒むブタもいた。それでも、授乳を拒む母ブタがいた場合には、牧夫が介入して、平素から持っている杖でブタの腹を何度かつつき、ブタを横倒しにしようと努める（写真20）。その結果、母ブタも子供に乳を与えるのを許して横になる。子ブタが、必死に母ブタに



写真19 母ブタと子ブタ・授乳風景（ブラマプトラ川沿い）



写真 20 母ブタの授乳に介入する牧夫

向かっていき、乳首に接近した結果、ようやく重い腰を下ろした母ブタもいる。ここで飼育されるブタには、5つの乳首が2列に並んでいるが、1頭1頭の子ブタに授乳する乳首の場所は決まっていた。

このような場面で、おのおのの母ブタの1回の出産における産子数や子ブタの死亡率を把握した。調査した群れ（表2のNo.6参照）は、35頭の母ブタと生後1.5ヶ月の182頭の子ブタから構成される。まず、図5は、産子数の頻度分布を示す。これによると、1腹当たりの母ブタ頭数は6頭、5頭、7頭の順に減少するものの3～10頭までとばらつきがみられ、1腹産子数の平均は5.97頭を示すことがわかる。しかしながら、図6のように1頭当たりの母ブタが授乳する子ブタの頭数をみると4～6頭に限定されていた。これは、母ブタ間で子ブタの移出と移入があるからである。

表5は、35頭のすべての母ブタの1回の出産における産子数、母ブタ間での子ブタの移出や移入、死亡率などを示す。この表より9頭の子ブタの移出に5頭の移入がみられる。これは、ほぼ同じ日に複数のブタが出産した場合、おのおののブタの産子数に大小ある時には、その数が等しくなるよう牧夫は一部のブタを別の母ブタの所に移動させた結果を示す。なお、移出と移入の差である残る4頭はどの母親の乳首へ行ったのかは不明である。同時に、1回の出産で6頭、7頭、10頭の子ブタが出生した場合にはそれぞれ1頭、6頭の場合には2頭、8頭の場合には3頭の子ブタを殺すこともみられる（表5参照）。さらに、209頭の産子数のなかで15頭の子ブタの死亡

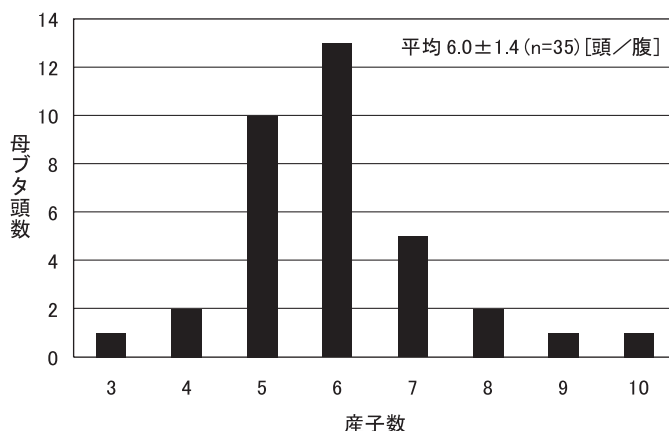


図5 産子数の頻度分布
出所：筆者の現地調査による

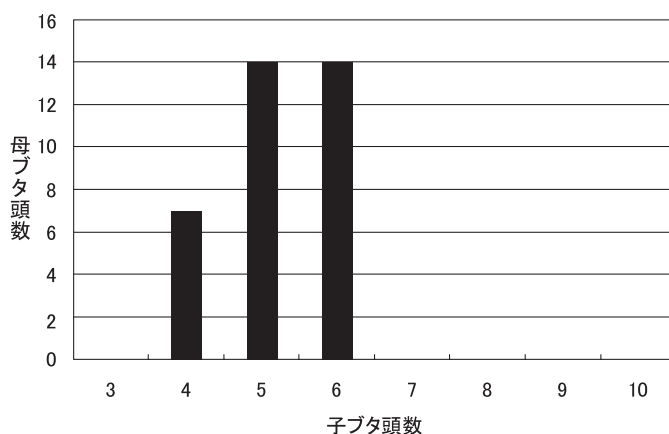


図6 1頭当たりの母ブタが授乳する子ブタの頭数
出所：筆者の現地調査による

を確認することができ、その死亡率は8.3%を示す。この原因は、不明のものが12例と多いが、キツネに殺傷されたものが2例、子供による負傷が原因のものが1例あった。

以上のことから、ブタ飼育者は、各母ブタへの負担を均等にする努力をしていることがわかる。生後まもない子ブタを殺すこと、別の母親への子ブタの移出など、厳しい環境下で野生植物に依存せざるをえない遊牧型における在来豚の適応戦略を示すと考えられる。

表5 母ブタの産子数とブタの移出と移入

母ブタ No.	産子数	飼育数	移出	移入	屠殺	死亡	死亡率	死亡要因
1	6	6	0	0	0	0	0.0	
2	10	6	2	0	1	1	10.0	キツネ
3	7	6	1	0	0	0	0.0	
4	6	6	0	0	0	0	0.0	
5	6	6	0	0	0	0	0.0	
6	4	4	0	0	0	0	0.0	
7	6	6	0	0	0	0	0.0	
8	5	5	0	0	0	0	0.0	
9	7	6	0	0	0	1	14.3	キツネ
10	5	5	0	0	0	0	0.0	
11	5	5	0	0	0	0	0.0	
12	6	6	0	0	0	0	0.0	
13	6	6	0	0	0	0	0.0	
14	8	6	0	0	0	2	25.0	不明
15	5	5	0	0	0	0	0.0	
16	6	6	0	0	0	0	0.0	
17	6	4	0	0	0	2	33.3	不明
18	7	5	2	0	0	0	0.0	
19	6	6	0	0	0	0	0.0	
20	5	5	0	0	0	0	0.0	
21	7	6	0	0	0	1	14.3	不明
22	6	6	0	0	0	0	0.0	
23	5	4	0	0	0	1	20.0	不明
24	5	5	0	0	0	0	0.0	
25	5	5	0	0	0	0	0.0	
26	6	4	0	0	0	2	33.3	不明
27	6	4	0	0	2	0	0.0	
28	4	4	0	3	0	3	75.0	2頭不明, 1頭は子供に負傷
29	6	5	0	0	1	0	0.0	
30	8	5	0	0	3	0	0.0	
31	9	5	4	0	0	0	0.0	
32	3	5	0	2	0	2	66.7	不明
33	7	4	0	0	1	0	0.0	
34	5	5	0	0	0	0	0.0	
35	5	5	0	0	0	0	0.0	
合計	209	182	9	5	8	15	291.9	
平均	5.97143	5.2					8.3	

出所：筆者による現地観察および聞き取り

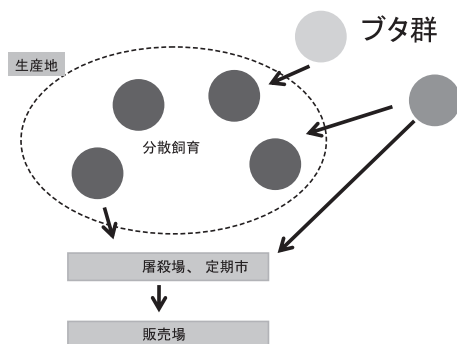


図7 ブタ遊牧の生産構造
出所：筆者作成

5 考察——熱帯モンスーンアジアのデルタでの遊牧——

本稿では、冒頭で述べたようにこれまでの遊牧を対象にした人間生態学・生態人類学の研究史においてブタを対象にした研究がみられなかったことをふまえて、熱帯モンスーンアジアにおけるバングラデシュのベンガルデルタのブタを対象にした遊牧の実態を把握することを目的とした。その結果は、図7のブタ遊牧の生産構造のなかでまとめることができる。

まず、調査地以外にもベンガルデルタには数多くのブタの遊牧が行われているが、現時点においてその全体像を明らかにすることはできない。本稿では、このなかの1例として大規模ブタ所有者におけるブタ遊牧の実際に関して主に生産面に焦点を当てて記述・分析した。その結果、本稿のように約1000頭のブタを所有する事例では、約30～40人の牧夫を雇うことによって6～8頭の群れからなる分散飼育が維持されており、消費地ダッカの近郊でブタを屠殺して販売するという商業目的が第一とされる。そこでは、自らの群れの中に繁殖集団を持っているのみならず、ブタの年齢に応じて群れを変えるなどして群れ全体の管理がなされている。他のブタ飼育者からブタが購入されることなどによっても、ブタの所有頭数が維持されていた。

冒頭で述べたように、これまでのブタ飼育の人類学的研究は放し飼いや舎飼いに焦点が置かれており、ブタの遊牧の存在はほとんど知られていなかった。しかしながら、ブタ飼育者に関する移動形態、分散飼育のあり方、ブタの餌資源の内容、放牧や出産をめぐるブタ群の管理技術などを通して、本稿ではベンガルデルタにおけるブタ遊牧の存在を提示することができた。とりわけ、ブタ飼育者は、各母ブタへの負担を均等にする努力をしている。生後まもない子ブタを殺すこと、別の母親への子ブタの

表6 出産数と死亡率の比較

一腹あたりの出産数（頭）	離乳前死亡率（％）	調査地	出所
10.5	10	日本	畜産大辞典編集委員会 1996
7.1	16	タイ	Nakai 2008
5.9	8.3	バングラデシュ	池谷 2009c

注）日本の例は農水省の1995年の目標数値を示す。

移出などは、厳しい環境下で野生植物に依存せざるえないブタ遊牧の適応戦略を示すと考えている。

5.1 ブタ遊牧の生産性

ここでは、このような粗放的とみられる遊牧によるブタ遊牧の生産性について日本やタイにおける養豚での出産数や死亡率などの資料を比較することから考察する。表6は、筆者により提示されたバングラデシュの基礎資料を含めて3つの地域における1腹あたりの出産数と離乳前の死亡率を示す。但し、この中でバングラデシュのブタ群の場合、上述したように多数の子ブタが生まれた場合には多頭飼育による栄養不良を回避するために、他の母親のもとに移出されることがあるので死亡率が低く抑えられる可能性があることに留意する必要がある。しかし、これによると、出産数は、日本のブタで10.5頭、タイで7.1頭に対してバングラデシュは5.9頭であり、その値は他と比べて大きくはない。しかし、離乳前の死亡率の方は、日本では10%、タイでは16%に対してバングラデシュのそれは8.3%と低くなっている。このことは、バングラデシュのブタ遊牧の家畜生産性は低い、子ブタを移動させる技術などで死亡率を抑えて、少ない生産数を補っているといえる。

繰り返しになるが、遊牧されるブタは、市販されている餌が与えられることはほとんどなく、一部のゴミ捨て場でのブタを除いて、1年を通してデルタに分布する野生植物に全面的に依存している。当初、筆者はベンガルデルタを平坦地として捉えていたが、その認識は誤りであった。細かく見ていくと、高さでいうと1mの違いが重要である。この違いによって、雨季が終わってからの水の引き方が微妙に異なってくる。ブタの足の長さを超える水面下ではブタは生存できないが、少ない水量では水面上に広がるホテイアオイのような植物を餌にすることができる。また、人々が農地を耕すようになるとブタの居場所が少なくなっていくが、収穫後の農地にはブタが入っていくことができる。ブタは、農民にとっては雑草と評価されている植物を掘り起こ

して根の部分を食べることができる。

これに対して乾季には、放牧地として収穫後の農地が利用される。そこには雨季と同様に農民にとっては雑草ではあるが、ブタにとっての餌が土の中にあり、ブタはそれを掘って食用にする。また、収穫後の水田には、稲の収穫の際にこぼれ落ちた米粒が残っており、それが利用される。農地が耕されて小麦やトウモロコシやジャートなどの畑地として利用されると、ブタの放牧をすることはできなくなり、牧夫はブタ群を連れて移動する。

以上のようなことから、バングラデシュのブタ遊牧は、餌用のコストがほとんどかかっていない点、100～200頭の単位ごとの群れで分散飼育して多様な環境の資源を季節や微地形に応じてきめ細かく利用する点などからみて、熱帯モンスーンアジアのデルタにおける自然特性に応じた資源利用の形をよく示している。

5.2 遊牧の比較研究のための枠組み

本稿のブタ遊牧の事例は、ラクダやトナカイなどの他の家畜を対象にした遊牧と、どこが類似していてどこが異なるのであろうか。筆者は、これまでケニアのソマリやインドのライカのラクダ遊牧、およびロシアのチュクチのトナカイ遊牧について研究をしてきた(池谷 2006)。以下、遊牧の移動形態、家畜の管理技術、放牧地をめぐる農耕民との関係の3つの点から比較検討する。

まず、移動形態では、ケニアのソマリの事例は、家族のメンバーがすべていっしょに移動するいわゆる典型的な遊牧であった。これに対して、ライカの場合は、定住した村があり、そこでは水牛を飼育して灌漑農耕も行っているなか、村を本拠地にして成人男性のみがラクダとともに季節的に移動する形態をとっていた。さらに、チュクチのトナカイ遊牧では、ロシアの国営農場という経営のなかで1年中トナカイとともに移動する形をとっていた。この場合は、遊牧とは異なる定住集落に家屋を持つものの本拠地はみられない。この形は、「生産遊牧」と呼ばれる⁷⁾(池谷 2006: 28)。

本稿の事例は、国家の管理のもとではないが、ブタ所有者が都市に暮らし、ブタ群が年中移動している点では、上述の「生産遊牧」の形態に類似するものであることを指摘できる。同時に、ソマリのように家族単位で移動するものではなく、インドのライカのように成人男性のみが職業集団をつくり家畜とともに移動している点が類似点として挙げられる。この点では、バングラデシュ国内においてブタ飼育のほかにはアヒルや水牛を対象にした移動牧畜の形態がみられるが、ブタ遊牧ほど頻繁に移動するものではない。

次に、群れの管理技術に関してみれば、ソマリのラクダ生産ではミルクの獲得が目的であり、群れの中に常に乳用の雌ラクダを確保することが求められている。これに対して、ライカのラクダ生産では運搬用の雄ラクダの販売が目的であり、雄ラクダの維持が求められる。さらに、チュクチではトナカイ肉の生産のためであり、本稿で示したブタ遊牧と生産目的がよく類似している。なお、本稿で言及した音声を使用してのブタの群れの管理技術は、ヤギやヒツジなどの牧畜研究ではすでに報告されており、今後、さらなる比較・検討を進めてブタの群れを管理する音声技術の特性について把握する必要がある⁸⁾。

最後に、放牧地として農地を利用する場合の農民との関係は、インドのライカのほかに西アフリカのフルベのウシ牧畜において同様の研究テーマでの研究が蓄積されてきた。これまで西アフリカのフルベのウシ放牧やインドのライカのラクダ放牧では、毎年、放牧に行く先がほぼ決まっていたその場所の農民との間での共生関係が知られている（池谷 2006）。農民の側にも家畜の糞が肥料源になるなど、その両者に利益があることが論じられてきた。しかし、同時にフルベの場合、農民との間での紛争も生まれている。本稿で述べたブタ飼育者と農民との間では共生や紛争のような関係が見当たらない⁹⁾。ブタ飼育者は、農地の所有者から放牧地を利用するための許可をとっているわけではない。これは、ブタ飼育者があまりにも数多くの移動を繰り返すので、農地を所有する農民との間で持続的固定的な関係が生まれにくいことが関与しているものと考えられる。

本稿は、バングラデシュのベンガルデルタにおける「大規模所有者」のブタ遊牧の生産面に焦点を当てたものではあるが、「小規模所有者」の場合のブタ遊牧の場合は分散飼育がみられないことに伴い、生殖管理技術の方法の違いなどが想定されるが、その詳細は明らかにされていない。このほかにも、ブタ遊牧に利用する自然資源をめぐる人と人との関係、ブタが売買される定期市をはじめとしたブタの流通面、さらにはバングラデシュにおけるブタ遊牧の行われている地理的範囲を確定することなど、まだまだ未解決な問題が残されている。これらの課題に関しては、稿を改めて論じる予定である。

付記

本研究は、文部科学省科学研究費『熱帯地域における農民の家畜飼育に関する環境史的研究』（基盤 A）（代表：池谷和信）、および『バングラデシュにおける在来家畜及び野生原種の遺伝資源学的・文化人類学的研究』（基盤 A）（代表：天野卓）によって現地調査が可能になった。また、

本研究の一部は、日本養豚学会、日本文化人類学会中部支部会、日本地理学会、人文地理学会、国際コモンズ会議、在来家畜研究会、モラルエコノミー研究会、総合地球環境学研究所シンポジウム（「人類文明の未来に向けて」）などですすでに報告をしている。その際に、貴重なコメントをいただいた関係者の皆様にお礼を申し上げます。また、筆者の調査対象であるブタ飼育者の皆さまに加えて、バングラデシュでの受け入れ先であるバングラデシュ農業大学の Md. Omar Faruque 教授には感謝を申し上げます。

注

- 1) バングラデシュの在来豚を対象にした遺伝学的研究や形態学的研究はみられる（黒澤 1988, Kurosawa 1995）。また、筆者は、バングラデシュにおけるブタ遊牧に関するこれまでの研究として、餌資源（池谷 2009b）、資源利用とコモンズ（池谷 2008a; 2008b; Ikeya 2011a）、管理技術（池谷 2009a）、生産（池谷 2009c）、経営（2010a）、定期市と流通（池谷 2010b）、家畜化と環境史（Ikeya 2011b）など、それぞれに焦点を当てて国内外の学会やセミナーにおいて報告してきたが、学術論文としての公表は本稿が最初のものである。
- 2) 家畜飼養のなかで、放牧地が共有の場合には牧畜（pastoralism）、私有の場合には畜産（animal industry）と呼ばれる（福井 1987; 池谷 2010d）。
- 3) バングラデシュ国内には数多くのブタ飼育者がいるが、その全貌は明らかになってはいない。また、ブタ飼育者のなかには大規模飼育者に加えてブタを供給する小規模飼育者がいるが、その実態についても知られていない。
- 4) ブタの餌となる野生植物に関しては、バングラデシュ農業大学の作物植物学者 Azad-ud-doula Prodhan 博士に植物同定をしていただくことができた。なお、ホテイアオイ（Common Water Hyacinth, *Eichhornia crassipes* (Martius) Solms-Laubach）は筆者の同定による。
- 5) バングラデシュのダッカ市内には、日本の JICA の援助によって建設された南アジアで最大規模のゴミ捨て場がある。筆者は、あるブタ飼育者からこのゴミ捨て場でブタの放牧ができないのかと JICA 関係者を介して尋ねるよう要請されたことがある。しかし、市当局は、そこにブタを入れることを断固として拒否している点を指摘しておきたい。
- 6) 筆者の調査によると、対象集団のブタの群れに限定されるが、これまでブタの放牧が森林内で行われたことはない。しかし、聞き取りによると 10 年に 1 度ぐらいでやってくる大洪水が起きたときには森林内に放牧に行くことがあるという。その森は、サラソウジュ（Sal tree, *Shorea robusta*）の木でおおわれた森である。なお、1990 年前後にダッカとマイメンシンを結ぶ道路沿いで森林内でのブタ群の放牧が観察されている（黒澤、私信）。
- 7) 「生産遊牧」という用語は、シベリアのシャーマニズムの研究者として知られる Vitebsky（ケンブリッジ大学）によって、ロシアの国営農場下のトナカイ飼育の移動形態に対して最初に使用された。
- 8) 筆者の調査によると、ブタの群れのなかの 1 頭の種雄に個体名がつけられていた。ある牧夫がそのブタに近づくと人に近寄ってきていた。この行動は、ブタと人のかかわり方を考える際に注目される。
- 9) イスラム教徒の農民は、ブタの糞尿が自らの田畑に落とされることに抵抗はないようにみえる。西アフリカの農民のように、肥料になっているから多目にみるという感覚が存在している可能性がある。

参考文献

池谷和信

2006 『現代の牧畜民——乾燥地域の暮らし』東京：古今書院。

2008a 「バングラデシュにおけるブタの遊牧と資源利用」『第 18 回日本熱帯生態学会講演要旨集』p. 42。

- 2008b 「バングラデシュにおけるブタの遊牧について」『人文地理学会大会研究発表要旨』 pp. 148-149。
- 2009a 「バングラデシュにおける遊牧ブタ群の管理技術」『第63回日本人類学会大会プログラム・抄録集』 p. 92。
- 2009b 「バングラデシュにおける遊牧ブタの餌資源について」『第19回日本熱帯生態学会講演要旨集』 p. 54。
- 2009c 「バングラデシュにおける遊牧在来豚の産子数と死亡率」『第92回日本養豚学会大会講演要旨集』 p. 13。
- 2010a 「バングラデシュにおける遊牧在来豚の養豚経営」『日本養豚学会誌』 47(2): 110。
- 2010b 「バングラデシュにおける家畜市と豚」『日本地理学会予稿集』 p. 312。
- 2010c 「ベンガルデルタにおける人と家畜とのかわり——放牧地として利用される水田」秋道智彌・小松和彦・中村康夫編『人と水Ⅱ 水と生活』 pp. 243-268, 東京: 勉誠出版。
- 2010d 「IV 生業 3 牧畜」綾部恒雄・桑山敬己編『よくわかる文化人類学 第2版』 pp. 36-41, 京都: ミネルヴァ書房。
- 梅崎昌裕
2000 「パプアニューギニア高地におけるブタ飼育の現在的意味」『動物考古学』 15: 53-80。
- 梅棹忠夫
1950 「乳をめぐるモンゴルの生態 1——序論, および乳しほりの対象となる家畜の種類について」『自然と文化』 1: 187-214。
- 1976 『狩猟と遊牧の世界』 東京: 講談社。
- 太田 至
1982 「牧畜民による家畜放牧の成立機構——トゥルカナ族のヤギ放牧の事例より」『季刊人類学』 13(4): 18-56。
- 大林太良
1955 「東南アジアに於ける豚飼育の文化史的地位」『東洋文化研究所紀要』 7: 37-146。
- 黒澤弥悦ほか
1988 「バングラデシュにおける在来豚の形態」『在来家畜研究会報告』 12: 135-145。
- 小谷真吾
2005 「ブタはどのようにして現金になりうるのか? ——パプアニューギニア高地辺縁部における生業生態と貨幣経済」『国立歴史民俗博物館研究報告』 123: 85-102。
- 小長谷(利光)有紀
1983 「オトルノート——モンゴルの移動牧畜をめぐる」『人文地理』 35(6): 68-79。
- 佐藤 俊
1992 『レンディーレ——北ケニアのラクダ遊牧民』 東京: 弘文堂。
- 谷 泰
1976 「牧畜文化考」『人文学報』 42: 1-58。
- 1994 「牧畜・牧畜文化」石川栄吉ほか編『文化人類学事典』 pp. 699-701, 東京: 弘文堂。
- 畜産大辞典編集委員会
1996 『新編畜産大辞典』 東京: 養賢堂。
- 野林厚志
2007 「中国農村社会におけるブタの多面価値」印東道子編『資源人類学 7 生態資源と象徴化』 pp. 247-291, 東京: 弘文堂。
- 福井勝義
1987 「牧畜社会へのアプローチと課題」福井勝義・谷泰編『牧畜文化の原像』 東京: 日本放送出版協会。
- 松井 健
2001 『遊牧という文化——移動の生活戦略』 東京: 吉川弘文館。
- Ali, M. S. et al.
2000 *Geo-spatial Tools for Analysis of Floodplain Resources*. Dhaka: The University Press Limited.
- Dhal G. and A. Hjort
1976 *Having Herds: Pastoral Herd Growth and Household Economy*. Stockholm: University of Stockholm.

- Ikeya, K.
2005 Livestock Economy and Camel Pastoralism among the Raika in India. *Senri Ethnological Studies* 69: 171–185.
2011a The pig herder and common resources in Bangladesh. Abstract of 11th International Commons conference in India. p. 104.
2011b Wild and domestic pigs in diverse environment. The Environmental Histories of Europe and Japan. The Oxford-Nagoya Environment Seminar. pp. 101–106.
- Ikeya, K. et al.
2010a The Taming Process of Red Junglefowl: Case Study of Hillside Farmers in Northern Thailand. In M. C. Sirindhorn and F. Akishinonmiya (eds.) *Chickens and Humans in Thailand: Their Multiple Relationships and Domestication*, pp. 73–97. Bangkok: Siam Society.
2010b A preliminary ethnological report about native pigs and humans in Bangladesh. *Report of the Society for Researches on Native Livestock* 25: 105–109.
- Kurosawa, Y.
1995 The Phylogenetic Relationship and Differentiation of Wild and Domesticated pigs in Asia. *Animal Genetic Resources: Efficient conservation and effective use*. Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries. Tsukuba, Japan. pp. 111–120.
- Nakai, S.
2008 Reproduction Performance Analysis of Native Pig Smallholders in the Hillside of Northern Thailand. *Tropical Animal Health and Production* 40: 561–566.
2009 Analysis of Pig Consumption by Smallholders in a Hillside Swidden Agriculture Society of Northern Thailand. *Human Ecology* 37(4): 501–511.
- Rappaport, R. D.
1968 *Pigs for the Ancestors: Ritual in the Ecology of a New Guinea People*. New Haven: Yale University Press.
- Singha, A. K. and A. Reza
2005 Study on the present status of pigs and their production system in tribal area of Modhupur. *Bangladesh Journal of Animal Science* 34 (1&2): 37–44.
- Umberto, A. et al.
2007 *Pigs and Humans: 10,000 Years of Interaction*. Oxford and New York: Oxford University Press.